

平成 30 年 5 月 18 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02589

研究課題名(和文) 言語インターフェース理論における極小主義遂行仮説の研究

研究課題名(英文) A Research on the Minimalist Performative Hypothesis in the Theory of Linguistic Interfaces

研究代表者

金子 義明 (KANEKO, Yoshiaki)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：80161181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、生成文法極小主義プログラムの枠組みにおいて、機能投射である遂行句を主節の最上位に設定する極小主義遂行仮説構築をめざし、言語インターフェースに関わる現象の諸相を分析した。極小主義遂行仮説のもとで、定形補部節の時制解釈における二重接触現象のメカニズム、不定詞補部節のモダリティ素性システム、単純時制形の解釈における制約のメカニズム等を提示した。さらに、統語対象を意味部門および音声部門とのインターフェースに送る「転送」の概念に対して本研究で考察された種々の解釈プロセスがもつ理論的帰結を示した。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have investigated aspects of linguistic interface phenomena to develop the Minimalist Performative Hypothesis, which posits the functional projection Performative Phrase at the top of the main clause, within the framework of the Minimalist Program. Under the Minimalist Performative Hypothesis, I have proposed the mechanism to account for the double access phenomena in finite complement clauses, the feature system of modality of infinitival complement clauses, the mechanism to restrict interpretations of simple tense forms, and so on. In addition, I have presented a theoretical consequence of interpretation processes investigated in this research on the notion of transfer, which sends syntactic objects to the two interfaces of the semantic and phonetic components.

研究分野：英語学

キーワード：極小主義プログラム 遂行仮説 インターフェース 生成文法 時制解釈

1. 研究開始当初の背景

生成文法の極小主義プログラムをはじめとする現代言語理論にとって、言語インターフェースに関わる諸特性の解明は最重要課題の一つとなっている。とりわけ、談話特性と統語論のインターフェースに関わる現象に関しては、一連の機能範疇句の存在を主張するカートグラフィーのアプローチによる研究が進められており多くの知見が蓄積されている。これに対して、本研究代表者は、最近の研究において、主節最上位に、話者、聞き手、および話者の発話行為に関わる機能範疇である遂行句が存在し、遂行句は TP 上に投射される一連の機能範疇に属するのではなく、それらを埋め込む節としての特性を備えていることを論じた。しかし、1970 年代に提唱された古典的遂行仮説は記述力が過剰であったため、十分な説明力を備えた理論とはならなかった。そこで、十分な制限力を備えた極小主義プログラムにおいて遂行仮説を確立し、話者の発話行為を統語構造に明示する理論のもとでの言語インターフェースの諸相の解明が必要であった。

2. 研究の目的

(1) 極小主義遂行仮説の確立：時制解釈、モダリティ等々の話者の発話行為に関わる言語現象を具体的分析対象として、極小主義プログラムに基づく極小主義遂行仮説の確立をめざす。

(2) カートグラフィーのアプローチとの発展的統合：これまでカートグラフィーのアプローチによる分析が与えられた言語現象を、フェーズ(phase)理論および極小主義遂行仮説に基づいて見直し、カートグラフィーのアプローチとの発展的統合をめざす。

(3) 新たな言語インターフェース理論の構築：古典的遂行仮説の理論的問題点の克服、極小主義遂行仮説の確立、およびカートグラフィーのアプローチとの統合を通して、極小主義遂行仮説を組み込んだ新たな言語インターフェース理論の構築をめざす。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、研究代表者が研究のすべての側面を統括し、代表者単独で研究を遂行した。研究期間は3年間とし、平成27年度は基礎研究、平成28年度は展開研究、平成29年度は総括的研究を行った。

(2) 本研究の3つの目標である、「極小主義遂行仮説の確立」、「カートグラフィーのアプローチとの発展的統合」、「新たな言語インターフェース理論の構築」について、それぞれの研究が有意義な相乗効果をもたらすように配慮して研究を行った。

(3) 研究推進に関わる情報については、文

献情報ならびに研究情報の収集をすすめた。また他研究者との人的交流につとめ、海外研究機関の研究者を招いた講演会を行った。

4. 研究成果

(1) 金子 (2016a) (下記論文) および Kaneko (2016) (下記論文) において、英語の定形補部節に見られる二重接触 (double access) 現象を説明する詳細なメカニズムを提案し、この現象における遂行句主要部の役割を明らかにした。二重接触現象は John heard that Mary is pregnant. のような定形補部節に見られる現象であり、従来、時制の一致の例外として扱われてきた現象である。この現象では、補部節の内容は、主節の出来事が生起する時点と、文を発話する時点の両方で成り立つと解釈される。上記例では、補部節の内容を John が耳にした過去の時点と、この文が発話される現在の時点の両方で成り立つと解釈される。Kaneko (2014) (引用文献) は、Uribe-Echevarria (1994) (引用文献) の提案を援用し、補部節 CP は論理形式 (logical form=LF) 部門で主節に付加されるとする分析を示唆した。

[_{Pfmp} Pfm [_{CP1} that Mary is pregnant
[John heard [_{CP2} that Mary is pregnant]]]]

この構造で、元位置にある補部節CP2の時制の評価時は主節動詞heardの事象時と同定されるので、主節の事象と同時点に成立すると解釈される。一方、主節に付加された補部節CP1の時制の評価時は遂行句主要部Pfmが含む発話時と同定されるため、CP1の事象は発話時において成り立つと解釈される。しかし、Kaneko (2014) では、このLF移動のメカニズムの詳細は述べられていなかった。これに対して、Kaneko (2016) は、潜在的に時制の一致が認可される環境での時制の分布制限と、補部節を埋め込む主節動詞がもつ語彙特性の相互作用により補部節のLF移動を説明する。

潜在的に時制の一致が認可される環境にある補部節の時制は、非直示 (non-deictic) 現在時制であってはならない。補部節を選択する命題態度動詞は、補部節の時制の評価時を同定しなければならない。

補部節の事象が発話時で成立することを表現するために、補部節の時制は直示的現在時制が選択される。しかし、直示的現在時制は遂行句 (performative phrase) の主要部 Pfm に同定されるため、命題態度動詞 heard の語彙特性を満たすことができない。この矛盾した状況を回避するため、補部節は LF 移動を受けて主節に付加され、付加された補部節の直示的現在時制の評価時は遂行句主要部 Pfm によって同定される。元位置の補部節では現在時制の直示性素性 [+deictic] が削除され、制約の違反を回避し、現在時制の評価時は主節動詞 heard によって認可され、heard の語彙特性が満たされる。CP2 と CP1 の出来事の一貫性

は両者が移動による連鎖を形成することにより保証される。このように、二重接触現象における補部節のLF移動は、潜在的時制の一致の環境内にある補部節の時制に対する分布制限と主節動詞の語彙特性によってもたらされる矛盾を解消するために適用される。

(2) 金子 (2016b) (下記論文) では、英語の単純現在時制や単純過去時制における非状態動詞の解釈上の制限について、その制限をとらえる時制表示に基づく制約を提案した。非状態動詞が単純現在時制形で生起する場合、発話時における完結した個別の事象(行為や出来事)を表わすことはできない。たとえば、下記 の文は発話時における個別の行為を表わすことはできない(#は個別の出来事・行為の解釈が不可能であることを示す)。

#Max eats an apple.

この文は、習慣等の非個別事象の解釈のみを許す。この現象を説明するため、2つの制約が提案された。

反個別事象解釈制約: ある節の時制表示の事象時 E_T と指示時 $R_{TP_{perf}}$ が同時であり、指示時 $R_{TP_{perf}}$ が時間軸上の時点を示すならば、個別的事象を表わすと解釈することはできない。

現在時制の反期間制約: ある節の時制表示の指示時 $R_{TP_{perf}}$ と評価時 E_VT が同時であるなら、指示時 $R_{TP_{perf}}$ は時間軸上の期間を表わすことができない。

単純現在時制は事象時 E_T と指示時 $R_{TP_{perf}}$ が同時であり、かつ指示時 $R_{TP_{perf}}$ と評価時 E_VT が同時であるので、帰結として発話時における個別の事象を表す解釈が不可能となる。これに対して、過去時制の文は、単純時制であるので事象時 E_T と指示時 $R_{TP_{perf}}$ が同時であるが、指示時 $R_{TP_{perf}}$ が評価時 E_VT (発話時)よりも以前の過去時であるので、制約の適用を受けない。したがって、このように特定の過去時点における個別事象を表すことはできないが、過去時制の指示時は期間を表すことができるので、このように過去の特定期間における個別事象を表すことができる。

#Yesterday morning at 10 Mary walked.

Yesterday morning Mary walked for two hours.

さらに、2つの制約の連動により、法助動詞を含む文および時制の一致の文における単純時制計の振る舞いが説明されるとともに、遂行句主要部 P_{fm} によって同定される直示的時制と主節の命題態度動詞によって同定される非直示的時制が制約に関して同じ振る舞いをする事が示されている。これは遂行句内に存在する話者と命題態度動詞の主節主語が、認識主体として同じ振る舞いをする事が浮き彫りとなり、遂行句における話者の存在を裏付けるものである。

(3) 金子 (2016c) (下記論文) では、英語の不定詞補部節の時制解釈について論じ、

Wurmbbrand (2014) (引用文献) の提案を受け入れ、未来志向型の不定詞補部節は、主節動詞が選択する抽象的法助動詞を含むとする分析を提案した。例えば、例文 の decide の不定詞補部節は未来志向性をもち、補部節内の事象は主節が表す過去時以降に生起すると解釈される。

Leo decided to read a book.

本論文では、ここでは decide が選択するモダリティに対応する抽象的法助動詞 Mod_{decide} を含む不定詞補部節 CP が選択されると分析される。主要部 C がもつ素性 $[+Mod_{decide}]$ が不定詞節の TP 主要部 T に継承され、その補部 ModP の主要部の Mod_{decide} と照合される。この抽象的法助動詞は未来法助動詞 will と同様に未来性を含むので、その帰結として の不定詞補部節の未来性が説明される。この分析では、主節動詞が不定詞補部節の未来性を指定することはない。主節動詞が行うのは不定詞補部節の TP の主要部 T の評価時 E_VT の同定のみである。この結果、直示的定形節、非直示的定形節、不定詞補部節のいずれの時制解釈も、それぞれ遂行句主要部 P_{fm} による直示的時制の評価時同定、命題態度動詞による補部節の非直示的時制の評価時同定、不定詞節を埋め込む動詞による不定詞補部節の評価時同定に基づいて行われ、時制解釈の根幹をなす評価時同定様式の統一化が可能となった。また、抽象的法助動詞による分析は、Wurmbbrand (2014) の提案を越えて、非未来志向型の不定詞補部節にも拡張可能であることが示された。

(4) 金子 (2017) (下記論文) では、英語の定形補部節における時制の一致と二重接触の時制解釈をめぐる、それらの現象で用いられる有標の仕組みの適用特性について論じている。時制の一致は下記 の文の補部節の内容が、任意の過去時の出来事を表すことができず、に対応する同時の解釈か、に対応する転移の解釈のみをもつ現象をさす。

Taro said that Hanako was a college student.

Taro said, "Hanako is a college student."

Taro said, "Hanako was a college student."

この現象に対して、Kaneko (2014) (引用文献) は、補部節の過去時制が内面的にもつ以前性を同時性に変更する解釈規則(時制の一致調整規則)を提案した。その解釈規則が適用されなければ転移の解釈が得られ、適用されれば同時の解釈が得られる。二重接触現象は、上記研究成果(1)で述べたように、時制の一致の例外として扱われてきた現象であり、John heard that Mary is pregnant. 補部節の内容が、主節の出来事が生起する時点と、文を発話する時点の両方で成り立つと解釈される。この現象に対して、Kaneko (2016a) (下記論文) は、補部節のLF移動に基づく分析

を提案した。このように2つの現象は追加の仕組みによって得られるが、それらの解釈に有標性は存在しない。この問題に対して、本論文では、時制の一致調整規則と二重接触現象のCP移動の2つの規則が、適格な意味表示を生み出すために適用される最後の手段として位置づけられることを論じている。これらの仕組みが最後手段として用いられる状況を作り出している最大の要因は、非直示的現在時制に対する の生起制限である。

潜在的に時制の一致が認可される領域にある補部節には非直示的現在時制が生起することはできない。

定形補部節には一般に非直示的時制が生起し、主節動詞によって非直示的評価時が同定される。しかし、 の制限により、時制の一致の領域にある補部節の事象と主節の事象を表す手段として非直示的現在時制を用いることはできない。この解釈上の隙間を埋めるため、時制の一致調整規則が用いられて同時の解釈が得られる。一方、二重接触でも、主節と補部節の同時性を表すために非直示的現在時制を用いることはできないため、かわって直示的現在時制が使用される。しかし、そのままでは制限 に違反するため、補部節はLF移動により主節に付加される。付加された補部節の直示的現在時制の評価時は遂行句主要部により同定される。元位置に残された補部節の時制は、直示性を表す素性が削除されて、 の違反が回避され、その評価時が主節動詞に同定される。このように、2つの現象に関わる仕組みは、いずれも最後の手段としての性格をもつため、追加の規則の適用を伴うにも関わらず、余分なコストを伴う現象ではなく、解釈上の有標性も存在しないことが説明される。

(5) 金子 (2018a) (下記論文)では、本研究で得られた知見に基づき、インタフェース理論の根幹に関わる転送の概念を論じている。フェーズ理論以降の極小主義プログラムに基づく研究では、かつての論理形式(LF)表示に相当する構造の存在基盤が失われ、LF表示によって捉えられていた一般化をどのように記述すべきか不明瞭になっていた。これに対して、Chomsky, Gallego, and Otto (2017) (=CGO(2017)) (引用文献)では、音声部門および意味部門どちらへの転送においても、転送される構造はもとの構造から消去されず、転送後の派生の段階で音韻規則および意味解釈規則の適用を受けることが可能であると提案された。本論文では、直示的時制の評価時の遂行句主要部による同定、時制の一致の現象における潜在的時制の一致環境の認可、時制の一致調整規則の適用、二重接触現象におけるCP節内の直示的評価時の遂行句主要部による同定、元位置のCP節の時制の直示性素性の削除、および元位置のCP節の評価時の主節動詞による同定に関する研究結果は、これらの言語現象が転送適用後の統語構造に言及して適

用される解釈規則によって説明されることを示し、その帰結として、従来の転送の概念を破棄すべきであることを示しており、上記CGO (2018)の転送の概念に関する提案の妥当性を示す経験的根拠となることを示した。

(6) 金子 (2018b) (下記論文)では、日本の学習英文法における時制の扱いについて論じている。まず、will を従来の未来時制ではなく、未来表現とする現行の学習指導要領の方針を踏まえて、過去仮定法、時制の一致、二重接触現象等の具体的言語現象に基づいて、法助動詞 will を未来時制ではなく未来表現として指導するに際しての言語学的根拠を明示している。さらに、節の概念を定形時制の存在に基づいて定義する従来の学習英文法の捉え方の問題点を指摘し、定形節に加えて非定形節の概念を導入すべきであることを論じ、そのための方策を提言している。

(7) 金子 他 (編) (2016) (下記図書)は、原口・中村 (編) (1992) (引用文献)の増補版であり、旧版が統率・束縛理論の用語を中心に扱っていたのに対して、増補版はそれ以降の極小主義プログラムの用語の解説を加えている。この増補版によって統率・束縛理論から極小主義プログラムの最新の展開にいたる生成文法理論の進展に関わる重要項目がほとんど網羅された。詳細な参考文献が掲載されており、極小主義プログラムの進展に重要な役割を果たした文献が網羅されている。

引用文献

- Chomsky, Noam, Ángel J. Gallego, and Dennis Ott, *Generative Grammar and the Faculty of Language: Insights, Questions, and Challenges*, *Lingbuzz*/003507, 2017
原口庄輔・中村捷 (編) *チョムスキー理論辞典* (研究社), 1992
Kaneko, Yoshiaki, *Remarks on Sequence of Tense in English*, *Explorations in English Linguistics* 28, 27-55, 2014
Uribe-Echevarria, Maria, *Interface Licensing Conditions on Negative Polarity Items: A theory of Polarity and Tense Interactions*, 米国コネチカット大学博士論文, 1994
Wurmbrand, Susi, *Tense and Aspect in English Infinitives*, *Linguistic Inquiry*, Vol. 45, 2014, 403-447

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

金子義明、学習英文法と時制の概念をめ

くって、英語学を英語授業に活かす(開拓社) 査読なし、2018年(編集中)

金子義明、極小主義プログラムにおける時制解釈と転送の概念についての覚え書き、文化、査読なし、81巻3・4号、2018、1-12

https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=125104&item_no=1&page_id=33&block_id=38

金子義明、時制の一致と二重接触における「最後の手段」について、言語をめぐるX章 言語を考える、言語を教える、言語で考える(埼玉大学教養学部)、査読なし、2017、73-87

KANEKO, Yoshiaki, Remarks on Double Access Phenomena in English Finite Complement Clauses, Explorations in English Linguistics, 査読なし, No. 30, 2016, 33-57

<http://www2.sal.tohoku.ac.jp/eng/EE L30/EEL2016Kaneko.pdf>

金子義明、不定詞補部節の時制解釈におけるモダリティについて、文化、査読なし、79巻3・4号、2016、42-58

https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2547&item_no=1&page_id=33&block_id=38

金子義明、単純時制と反個別事象解釈制約について、現代の言語学を知る 26考(研究社) 査読なし、2016、57-68

金子義明、定形補部節における時制の一致と二重接触について、JELS、査読なし、No.33、2016、45-51

〔学会発表〕(計 1 件)

金子義明、定形補部節における時制の一致と二重接触について、日本英語学会第33回大会(招待講演)、2015年11月22日、関西外国語大学中宮キャンパス

〔図書〕(計 1 件)

金子義明 他(編) 研究社、増補版 チョムスキー理論辞典、2016、798

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

<http://www2.sal.tohoku.ac.jp/eng/kaneko.htm>

<http://db.tohoku.ac.jp/whois/detail/35702a60ba85e61f35e54041a2961c5f.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金子 義明(KANEKO, Yoshiaki)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：80161181

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()